

名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科
平成 27 年度 学位（課程博士）論文要旨

Graduate School of International Studies
Nagoya University of Foreign Studies
Thesis or Dissertation

学位論文題目 Title	日中大学生接触場面の初対面雑談会話におけるラポールマネジメントトピックの選択および話題部の導入と終了を中心に— Rapport Management in first-encounter conversations between Chinese Learners of Japanese and Japanese Native Speakers: Focusing on Topic Selection and Topic Opening and Closing
氏名 Name	季 珂南 Ji, Kenan
専攻分野 Field of Study	博士（日本語学・日本語教育学） Doctor of Philosophy in Japanese Linguistics/Pedagogy
学位授与の日付 Date	2015 年 9 月 30 日 September, 30, 2015
学位記番号 Diploma Number	甲第 11 号 No. Ko-11
論文審査委員 Dissertation Committee	尾崎明人 教授 中道真木男 教授 田中真理 教授 佐々木泰子 お茶の水女子大学教授 Professor Ozaki, Akito Professor Nakamichi, Makio Professor Tanaka, Mari Professor Sasaki, Yasuko Ochanomizu University

【キーワード】

ラポールマネジメント、会話ストラテジー、トピックの選択、話題導入部、話題終了部、日中接触場面、中国人日本語学習者
rapport management, conversation strategies, topic selection, topic opening, topic closing, Chinese-Japanese contact situations, Chinese learners of Japanese language

論文要旨

コミュニケーションの取り方に言語文化的なギャップが存在するため日本人学生と中国人留学生が互いに親密な関係を上手く築けないという異文化接触場面の現実がある。一方、今日の日本語教育の世界では、「相互理解のための日本語」「異文化理解能力」を重んじるという基本理念のもと、会話ストラテジーを学習項目として学習者に提示し、日中接触場面における対人コミュニケーション能力を身につけさせる必要性が高まっている。日本語の会話ストラテジーに焦点を当てる研究は 1980 年代に始まり、接触場面の関係構築に有効な会話ストラテジーのリストが提案されているが、このようなリストにはさらに精緻化する余地がある。そこで、本研究では日中大学生の異文化間交流における関係構築に有効な会話ストラテジーを解明することを目的とした。この目的のもとに、本論文は 9 章構成でまとめられている。

第 1 章では上記のとおり研究の背景および意義を説明したうえで、本研究の課題を説明した。親密な関係を構築する手段は多岐にわたるが、本研究では「トピックの選択」および、「話題導入部」と「話題終了部」における言語行動に焦点を絞り、次の 3 つの研究課題を設けた。

- (1) 接触場面における中国人留学生 (C) と日本人大学生 (J) のコミュニケーション行動を比較し、その相違点を明らかにする。
- (2) 関係構築が順調であるペアと順調ではないペアを比較し、その相違点を明らかにする。
- (3) (1) と (2) の結果を踏まえ、日中接触場面のラポール構築に有効な会話ストラテジーを明らかにする。

第 2 章では、コミュニケーション、会話、雑談など、本研究に密接にかかわる鍵概念を定義し、コミュニケーション能力や親しさのコミュニケーション、会話ストラテジーにかかわる諸理論および関連する先行研究を概観した。特に、本研究が依拠する Spencer-Oatey の「ラポールマネジメント」理論について説明した。この枠組みは、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論に比べ、社会的な立場や「面子」を重んじる日本や中国の社会文化的背景を考慮している点で本研究の会話データを解釈するのに適していると判断した。

第 3 章では、研究方法について説明した。本研究は、初対面、または初対面に近い中国人留学生（中級学習者 5 人と上級学習者 5 人）と日本人学生のペア、10 組の会話（約 9.2 時間）を分析した。さらに、会話終了後にこの 20 人の調査協力者にフォローアップ・インタビュー（約 18.5 時間）を行い、その報告をもとに関係構築が「順調」であった 5 ペアと「不調」であった 5 ペアを判定した。また、日本語母語話者 2 人に「上位話題」の切れ目の認定作業を依頼し、157 の「話題部」を認定した。

第4章では、日常会話の全体構造を説明し、「話題」と「トピック」という用語を定義した。まず、ザトラウスキーのモデルを参照し、会話の全体構造は「開始部」「主要部」「終了部」と呼ばれる3つの談話単位に分けられることを指摘した。次に、会話の「主要部」を構成する談話単位として「話題部」を設定し、「話題部」とは一つのトピックが導入、展開、終了するまでの発話連鎖であると定義した。一方、会話の際に取り上げられる事柄、会話の内容という意味で「トピック」あるいは「話題」という用語を用いることを説明した。

第5章では、「トピックの選択」とラポール構築との関連性に焦点を当て、「話題選択肢リストとトピックの項目」および「直前のトピックとの文脈的関連性」という2つの面から分析し、考察した。

まず、分析対象となった153のトピック（一時中断し、後で再び取り上げられた4つのトピックを除いた）を内容の関連性によって12カテゴリー・24項目に集約した。この12カテゴリー・24項目を今回の日中大学生の接触場面の初対面会話における話題選択肢リストと認定した。CとJの12カテゴリーの選択率および、フォローアップ・インタビューの報告から、Cは初対面会話で「プライベートな自己の開示」を重視するのに対し、Jは「話し相手とのトピックの共有」を重視することがわかった。

この文化的相違に着目し、順調ペアと不調ペアのトピック選択を比べると、順調ペアのCは不調ペアのCより、相手と共有できるトピックを多く取り上げ、また、相手にプライベートなトピックを多く振っていた。したがって、順調ペアのCは、相手側（J）と自分側（C）が重視するトピック選択のポイントを心得ていることがわかった。

次に、「文脈的関連性」に関しては、トピックを先行トピックとの関連性から「新出型」「派生型」「再生型」の3タイプに分けた。その比率は、CとJの間で相違はなかった。しかし、「派生型」をさらに「相手発話派生型」と「自分発話派生型」に分けて分析したところ、不調ペアのCだけは「自分発話派生型」が多かった。このことが「Cは自分のことを一方的に話す」という否定的印象をJが抱いた一因だと推察された。

第6章では、「話題導入部」の談話展開パターンとラポール構築との関連性を分析した。

まず、「話題導入部」には、「情報要求」で始まるものと「情報提供」で始まるものがある。この2種類の比率を調べると、順調ペアはCもJも「情報要求」の方が多い。つまり、お互いに相手に質問して話題を相手に振っていた。それに対して、不調ペアでは、Jは「情報要求」の話題導入の方が多かったが、Cは「情報提供」の話題導入の方が多かった。また、Cの話題導入回数はJのほぼ倍であった。不調ペアのCはフォローアップ・インタビューにおいてJに対して「あまり自分のことをしゃべってくれない」と報告していた。このような印象を持ったことの一因は、不調ペアにおけるCとJの話題導入のアンバランス

にあると推察される。

次に、「話題導入部」には、「話題の導入～導入の合意」と「導入の合意～話題の確立」の2つの段取りがあり、さらに、次の4つの展開パターンがあることがわかった。

- (1) 即時的確立：2つの段取りのどちらか一方、または両方が見られない。「情報要求」で始まる話題導入部の場合は、「話題の導入～導入の合意」の段取りしかなく、合意者が一人で合意と確立を行うケースである。「情報提供」で始まる話題導入部の場合は、話題の導入者が相手の合意を待たずに一方的に話題を確立するので、2つの段取りがいずれも見られない。
- (2) 漸次的確立：2つの段取りが明確に認められ、それぞれの段取りが1往復のやり取りで完結している。この場合は会話参加者双方の合意の上で話題が速やかに確立されていると考えられる。
- (3) 合意遅れ：「話題の導入～導入の合意」のやりとりが2往復以上である。
- (4) 確立遅れ：「導入の合意」がなされた後で「導入の合意～話題の確立」のやりとりが2往復以上である。

「情報要求」で始まる話題導入部の展開パターンは、全体的にみればCもJも、順調ペアも不調ペアも、「確立遅れ」>「漸次的確立」>「合意遅れ」>「即時的確立」という比率分布であり、違いはなかった。ただし、Cが導入者の場合、順調ペアの方が不調ペアより「確立遅れ」が少ない。つまり、順調ペアのJは不調ペアのJよりCの情報要求に応じて速やかに情報を提供して話題を確立していた。この違いの原因を調べたところ、順調ペアのCはJの最初の情報提供に対して積極的にフィードバックを出してJが話題を確立するように促していることがわかった。また、「確立遅れ」が発生したケースを詳細に分析したところ、話題導入者が相手の最初の応答を受け止めた後、自ら関連の情報を提供したために、話題の確立者を決める交渉が長引くケースが見られたが、このようなケースはCが話題導入者の場合にしか見られなかった。この違いから、導入者Cは導入者Jより相手に話題の確立者になってもらうように支える意識が弱いことがうかがわれた。このような中国人と日本人の会話運営の仕方の違いに気づかなければ、中国人は日本人が積極的に自分から情報を提供してくれないという印象を抱いてしまうことが今回のインタビューによってわかった。

次に「情報提供」で始まる導入部では、4つの展開パターンの比率は、導入者がCである場合とJの場合とでは異なっている。1つ目は、「即時的確立」は導入者Cにしか見られなかった。2つ目は、4つのパターンのうち、Jが導入者の場合は「漸次的確立」が一番多いのに対してCが導入者の場合は「確立遅れ」が一番多かった。さらに、順調ペアと不調ペアを対照したところ、「即時的確立」の使用と「確立遅れ」の高い比率が不調ペアのほうには目立って見られた。この結果から、情報提供の発話で話題を導入し、相手の合意を待たずに一方的に話題を確立するという展開および、話題の導入に参加者双方が合意

した後、導入者がすんなりと話題を確立することができないという展開がラポール構築を阻害する要因になることがわかった。ただし、今回のデータではCがすんなりと話題を確立することができないのは、中級日本語学習者（C01～C05）の日本語レベルの不足が一番大きな要因になっている。この点からすれば、日本語能力の不足は、会話の円滑な進行を妨げ、ラポール構築を阻害する原因として見逃せないといえよう。

第7章では、「話題終了部」のプロセスを「協働的終了」「一方的終了」「突発的終了」に分類し、ラポール構築との関連性を分析した。

まず、この3つのパターンは、両言語の母語場面だけでなく、今回の日中大学生接触場面にもみられたが、「協働的終了」の全体に占める比率は80.6%で、CもJも3つの話題終了パターンのうち「協働的終了」が一番多いことがわかった。この比率は、先行研究で報告されている中国語母語場面の「協働的終了」の比率（41%）のほぼ倍である。このことから、中国人学習者は母語の話し方を日本語接触場面に持ち込んでいるとはいえないことが明らかになった。しかし、「協働的終了」の比率が90%を超える5つのペアのうち、ラポール構築に成功したと判断されるペアは3つだけであったことから、「協働的終了」がラポール構築に必ずしも貢献するわけではないことも明らかになった。

「一方的終了」と「突発的終了」の比率はいずれもCのほうがより高いが、順調ペアと不調ペアの間に相違があった。順調ペアではCとJがお互いに「一方的／突発的終了」を行っているのに対して、不調ペアではCだけ「一方的／突発的終了」を行っているペアがみられた。この点から、「一方的／突発的終了」は会話参加者双方が対等的に行えば、ラポール構築を阻害しないが、片方の会話参加者が一方的に行えば、ラポール構築に支障をきたすと推察される。

さらに、話題終了パターンとその後の局所的な文脈について順調ペアと不調ペアを対照したところ、2つの相違点が観察された。1つ目は、「一方的／突発的終了」の後に続くトピックの内容である。順調ペアではすべて「相手トピック」か「共通トピック」であったが、不調ペアのCには「自分トピック」を選び、その話題に熱中して相手の「公平の権利」を十分考慮していないケースが観察された。2つ目は、「協働的終了」の後で後続トピックが導入されるまでの沈黙である。沈黙が少なければラポール構築が促進されるとは言えないが、10秒を超える長い沈黙が数回発生していたペア5とペア10はラポール構築に失敗していた。これらの相違から、話題を「一方的／突発的」に終了させて「自分トピック」を導入して自分側の話に熱中するという話題転換の仕方および、「協働的終了」の後の長い沈黙はラポール構築にマイナスであることが確認された。

第8章では、第5、6、7章の分析結果、および今回のデータに観察された他の会話ストラテジーを加えた計23項目を、「ラポールマネジメント」の理論的枠組みにそってラポールストラテジーとして提示した。

第9章では、第1章で提示した3つの研究課題について本研究で明らかになった主な結果をまとめ、今後の課題を述べた。

【研究課題1】CとJの主な相違点

- ①Cは「プライベートな自己の開示」を重視するのに対し、Jは「話し相手とのトピックの共有」を重視する。
- ②JはCより相手に質問をして話題を振っていた。
- ③JはCより相手に話題を振った後、相手からさらに情報を引き出す意識が強かった。
- ④Cは「情報提供」で話題を導入し一方的に確立することがあったが、Jはなかった。
- ⑤Cは「情報提供」で話題を導入し相手が合意した後、話題の確立に手間取ることがJより多かった。それは、中級日本語学習者（C01～C05）の日本語レベルの不足が一番大きな要因であった。

【研究課題2】順調ペアと不調ペアの主な相違点

- ① 順調ペアのCは不調ペアのCより、相手側（J）と自分側（C）がそれぞれ重視する話題選択のポイントを心得ていた。
- ② 順調ペアのCは不調ペアのCより情報要求の話題導入をしたため、相手のJにより多く自己開示をしてもらえた。
- ③ 順調ペアのCは相手に質問して話題を振った後、相手の応答に積極的にフィードバックしたため、順調ペアのJはより速やかに話題を確立していた。
- ④ 不調ペアのCは情報提供の話題導入の際に相手の合意を待たずに一方的に話題を確立することがみられたが、順調ペアのCにこのようなことは見られなかった。
- ⑤ 順調ペアのCは不調ペアのCより、情報提供の話題導入に相手が合意した後、速やかに話題を確立することが多く、会話の円滑な進行を保っていた。
- ⑥ 順調ペアのCは話題を「一方的／突発的」に終了した後、「相手トピック」「共通トピック」を選択し、不調ペアのCより相手に配慮していた。
- ⑦ 順調ペアは不調ペアより「協働的終了」の後、沈黙が短く、会話がより円滑であった。

【研究課題3】中国人日本語学習者のためのラポールストラテジー

- ① 相手に配慮してトピックを選択する（相手の興味や関心に合わせてトピックを選ぶ／相手の発話に関連してトピックを選ぶ）。
- ② 相手に自己開示を促すためには、プライベートなトピックを積極的に相手に振る。
- ③ 自ら情報を提供して話題を確立する際に、トピックに対する相手の関心や共有の度合いに配慮する。
- ④ 相手に情報を要求して話題を確立してもらうために、相手に情報提供を促すフィードバックをする。
- ⑤ 相手が導入した話題が確立するように積極的に協力する（相手にさらに情報を提供し

て話題を確立してもらうよう働きかける／自ら話題にかかわる情報を提供して話題を確立する)。

- ⑥ 話題を「一方的／突発的」に終了した場合は、「相手トピック」あるいは「共通トピック」を選ぶ。

さらに、本研究は上記のストラテジーを含めた計 23 項目からなるラポールストラテジーリストを提示した。

このリストを中国人日本語学習者のコミュニケーション能力育成のために必要な学習項目として提案したが、これからさらなる研究を進めていく必要がある。本論文は、日中接触場面のラポールストラテジーに関わる研究における今後の課題について、次の 4 点を挙げた。

- (1) 学習者の日本語レベルとラポール構築との間にどのような関係があるかを明らかにするためには、中国人日本語学習者の日本語レベルをできるかぎり統一し、ペア数を増やして「ラポール構築が順調であるペア」と「ラポール構築が順調ではないペア」との間で言語行動を対照して分析しなければならない。
- (2) ラポールストラテジーの研究をさらに発展させるためにフォローアップ・インタビューだけでなく、会話データを精緻に分析することや、第 3 者の母語話者にコメントしてもらうことなど複数の研究方法を併用する工夫が必要である。
- (3) 日本語接触場に臨んだ中国人が中国語のラポールストラテジーを接触場に持ち込んでいるのか、あるいは、日本人が相手を中国人だと意識して、日本語母語場面とは違うラポールストラテジーを使っているのかを明らかにするには、同じ調査対象者の母語場面の会話と接触場面の会話を対照させる必要がある。
- (4) ラポールマネジメントの手段について、トピックの選択、話題部の導入、話題部の終了という 3 点に限らず、着目点をさらに拡大する余地がある。それに、局所的な文脈ではなく、より長い文脈で考察する必要がある。

今後、上に挙げた 4 つの課題を踏まえてさらなる研究を進めていく必要がある。また、日本語教育に携わる者として、研究の成果を教育現場に利用するための工夫を重ねることを課題としたい。